「仏遺教経」の旋律に反映した国語のアクセント

桜井茂治

（はしがき）
一、資料の吟味
二、旋律に反映したアクセントの考察
三、異例の考察
（あとがき）

（はしがき）

仏教音楽、即ち《声明》には国語のアクセントを反映しているものがあり、国語アクセント史の資料として貴重なものであることは、つとに先学の注意して来たところである。(1)

小稿で問題にしようとする「仏遺教経（ブツユイギョキョウ）」も一種の音楽的旋律をもって唱えられる経文で、今でも禅宗などで、〃お通夜〃の時などに行われているものである。

かって、金田一春彦先生は、(2)この仏遺教経の旋律を表す音譜にはアクセントが反映し、国語アクセント史上注目すべき資料であることを説かれた。

小稿は、この先生の御研究を継いで、旋律に反映しているアクセントの内容を明かにし、更に、異例とされるものについて〃旋律の変化〃其の他の考えを導入しながら説明を試み、この資料のアクセント史上に占める位置について論述したものである。

各位の御教示を賜れば幸いである。

〔註1〕橋本進吉博士「国語史研究資料としての声明」(橋本進吉博士著作集第四冊「国語音韻の研究」所収二〇ページ)

金田一春彦先生「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」(田辺

先生還暦記念「東亜音楽論叢」二七一ページ以下）

〔註2〕「古代アクセントから近代アクセントへ」（国語学二十三輯）

一、資料の吟味

《仏遺教経》は、別名「仏垂般涅槃略説教誡経（ブッシハンネハンリャクセツキョウカイキョウ）」とも呼ばれ、釈迦が涅槃に臨んで弟子達に残したという教誡で、現在は禅宗に伝わり、広く行われている経文である。

この経文には、本文のわきに〃声明〃で曲節を示す《節博士》を註記したものがあり、古来或る種の音楽的旋律で唱えられてきたものと思われる。

しかし、この種の曲節を今に口で伝えている人は極めて少なく例えば、よくこの経文を唱えて居られる関碓元氏の御教示によれば、現在この経文の曲節は、各人各様の声域で、比較的自由に唱えているとのことであり、実際に関氏の誦経を拝聴したところでもその感を強くした。

したがって、我々は現在口に伝えられている節によって、古い曲節を推測することは無意味に近く、もっぱら譜本でその曲節を観察しなければならない。次に、《譜本》及び曲節を表記する《節博士（フシハカセ）》について吟味して行くことにする。

まず、筆者の見ることができた仏遺教経の版本は、次の通りである。

㈠、安政五年版・仏遺教経・（金田一春彦先生蔵）
㈡、刊期不明・仏遺教経・（中田祝夫氏蔵）
㈢、刊期不明・仏遺教経・（筆者蔵）

以上各一巻である。㈠、㈡、㈢、の諸本は本文の体裁、節博士を比較すると、いずれも同一版から出たもので異動がない。しかし、紙質、表紙の体裁などから、㈠よりも㈡、㈢の版本の方が古いと考えられる。小稿では刊期の明白な㈠、安政五年版の版本をテキストとして考察を進めて行くことにする。

体裁を記すと、この本は、縦二十八糎、横十糎の普通のお経に見られる折本で、まず、表紙に、「改正博士科註新版仏遺教経」の題名があり、表紙裏には、唐太宗文皇帝の「仏遺教経施行勅」の文字が見られる。本文は例えば

蜂ヲノ採レルニ華但ダ取テ其ノ味ノミヲ……（5・2）

の如く、まず、漢文の文字があり、右側に返り点、送り仮名が記されている。そして、左側に曲節を示す節博士（例えば「徵（チ）」（〔）「角（カク）」（一）の如き）があり、これがアクセントを反映していると思われるものである。

それでは、これらの譜によって表わされる曲節は、一体いつ頃のものであろうか。

現在の譜本には、残念ながらこの点に関する記述がない。また、それについて言い伝えの類もないようである。

それでは、《仏遺教経》は、我が国でいつ頃から行われていたのであろうか。これについても残念ながら明確な資料が見出されないが、例えば「四座講縁起」(1)に引用された明恵上人(2)の日記、その他によれば、当時（鎌倉初期）上人自身〃「仏遺教経」を講讃した〃由が明記されて居り、このことから、既に鎌倉初期頃から或る種の音楽的旋律で唱えられていたことが明かである。

とすると、今の譜本の旋律に反映しているアクセントは鎌倉初

期のものとみてよいかということになるが、これが、これから考察しようとするテーマである。

さて、ここで《節博士》について述べて置きたい。

《節博士》は、声明道で用いられる音譜で、講式、祭文、表白論義の類の旋律は、これを以て表記されている。「宮」(キュウ)(｜)、「商」(ショウ)(／)、「角」(一)、「徴」(、)、「羽」(ウ)(｜)の五種類から成る音譜の一種で覚意上人の創作と伝えられている。(3)

ところで、語る声明である講式類には、特に五種類の譜の中で「徴」「角」が多く用いられており、かの「補忘記」のように、ほとんど「徴」「角」だけで曲節を註記しているもあるくらいである。そして、各種の譜本を通じて「徴」・「角」が連続して現れるところは、最も語る要素が多く、したがってアクセントを比較的正しく反映していると見られる。

元来、「徴」と「角」の関係は、《律旋法では西洋音階のラとソ》というように、音程のちがいがきまっているが、かなり以前から〃「徴」は唯単に「角」より高い音〃と言う程度に考えられいろいろの音程の差で唱えられている。

したがって、「仏遺教経」には「宮」「商」「角」「徴」「羽」の節博士を用いているが、小稿ではこの中から「徴」「角」だけを考察の対象とし、「徴」を高調、「角」を低調の曲節として、論述を進めて行くことにする。

〔註1〕大山公淳氏の「声明の歴史及び音律」によれば「延宝六年一月三日甲州巨麻郡加賀美山法善寺書写」とのことである。

〔註2〕貞永元年歿（一二三二）、四座講式の作者。

〔註3〕嘉禎三年（一二三七）生、寂年不明。

二、旋律に反映したアクセントの考察

さて、本論に入って、ただちに「仏遺教経」の旋律に反映しているアクセントの内容及び旋律とアクセントの関係について検討して行きたい。

まず、仏遺教経の旋律を示す節博士に語のアクセントが反映していると見られるものについて考察して行こうと思う。なお、この外にアクセントを反映していない異例もあるが、これは、後で述べるごとく、総て〃曲節変化〃その他で説明できる。(〔B〕の考察を見よ)

この経文は、漢語が多く、倭語の例は比較的に少いが、いま、「仏遺教経」の曲節を取りあげ、「徴」を$\overline{\bigcirc}$、「角」を○としてその型を、類聚名義抄をはじめ伊呂波字類抄、その他のアクセントとを比較した結果、両者の型の一致する例をあげると次表の通りである。(〔1・1〕は一枚目の表の一行目〔1：1〕は、一枚目裏の一行目を示す)。

〔A表〕

〔一音節語〕

a 助詞と共に徴徴型（$\overline{\bigcirc}$〔$\overline{\bigcirc}$〕）、名義抄で上上型のもの。

(例) 世に〔18：1〕〔2：1〕。

〔二音節語〕

b 徴々型（○○）のうち、名義抄で上上型（○○）の例。

㊔之(コレ)〔3・4〕〔4・1〕〔5：3〕〔5：4〕〔6・4〕〔9：3〕〔15・2〕〔18・2〕〔19：3〕是(コレ)〔3：4〕〔7：1〕

〔14・2〕〔16・4〕〔17：1〕。此（コノ）〔2・1〕〔4・2〕〔4・2〕〔5・3〕〔7：2〕〔12・3〕〔13・3〕〔13：4〕〔14・1〕〔17：2〕〔17・3〕〔14・4〕。是（コノ）〔9・1〕。口〔7・3〕。蜂〔5・2〕。道〔16：2〕〔17・4〕。其（ソノ）〔5・3〕〔9・2〕〔14・4〕。支（エダ）〔7：3〕

c **徵**角型（○○）のうち、名義抄で**上**平型（○○）の例。

㊔昼〔6：2〕。人〔8：4〕。月〔16・2〕。

(動)入（イ）る〔3・4〕。捨つ〔15：4〕。聞く〔16：2〕〔17：4〕

d 角々型（○○）のうち、名義抄で平平型（○○）の例。

㊔時〔6：2〕。事〔10：4〕。者〔7：4〕。

e 角**徵**型（○○）のうち、名義抄で平**上**型（○○）の例。

㊔患（トガ）〔15：2〕〔16：1〕。中〔8・4〕。船〔14：3〕。

(動)有る〔10・4〕〔13・4〕〔13：3〕。在（ア）る〔13：3〕。出ず〔6・4〕〔7：1〕。受く〔5・1〕。会ふ〔18：2〕。出る〔6・4〕〔7：1〕。採（ト）る〔5・2〕。解く〔7・2〕。説く〔1・2〕為（ナ）す〔14：4〕。臥す〔10・3〕。触る〔10：4〕

(助動)可（ベシ）〔3・3〕〔6・4〕〔6・4〕

〔三音節語〕

f **徵々々**型（○○○）のうち、名義抄で**上上上**型（○○○）の例。

㊔衣〔9：1〕。所〔9：3〕〔10：4〕〔11・1〕〔10・2〕〔6：4〕〔13：2〕〔18：3〕汝〔10・2〕。鎧〔13：1〕

g **徵々**角型（○○○）のうち、名義抄で**上上**平型（○○○）の例。

(形)難し〔12：2〕。(動)唱ふ〔16：4〕。

h 角々**徵**型（○○○）のうち、名義抄で平平**上**型（○○○）の例。

㊔心〔4・3〕〔7・2〕〔13：3〕。(動)除く〔5・2〕。

(副)当（マサ）に〔4：2〕〔6・3〕〔7・2〕。而も〔7：1〕〔19：3〕。既（ステ）に〔1：4〕〔6・4〕。

i 連体形が**徵々**型（○○）に表記されて居り、名義抄でも連体形**上上**型の動詞。

(動)在（ヲ）く〔12・4〕。捨つ〔9：1〕〔15：4〕〔19：2〕。入（い）る〔13：2〕。足る〔4・4〕〔10・1〕。

j 連体形が**徵々々**型（○○○）に表記されて居り、名義抄でも**上上上**型（○○○）の例。

(動)及ぶ〔8：1〕。渡る〔14：3〕。廃る〔6：3〕

k 名義抄で**上**平型の未然形が**徵々**型に表記しているが、未然形は**上上**型である故に一致する。(1)

(動)捨つ〔9：1〕。足る〔4・4〕〔10・1〕。

以上、一、二、三音節語について、「名義抄」をはじめ、「伊呂波字類抄」「字鏡」など院政末期のアクセント資料と比較した結果、両者の高低関係が一致する例である。特に同じ語が数多く出て来る場合、統て同じ型の節博士で記されている事実は、明かに語のアクセントを反映していることを物語っていると思う。

さて、そこで、これらのアクセント体系は、一体いつ頃のものであろうか。

いま、これを明かにする方法として、これらの型の体系を、名義抄その他の資料で代表される院政末期のアクセント体系、及び補忘記によって代表される近世初期のアクセント体系と対比すれ

ば、次の通りである。

		〔院政末期〕	〔仏遺教経〕	〔近世初期〕
（一音節語）	㈠	上型	徴型	上型
	㈡	平型	□	上型
	㈢	平型	□	平型
（二音節語）	㈠	上上型	徴々型	上上型
	㈡	上平型	徴角型	上平型
	㈢	平平型	角角型	上平型
	㈣	平上型	角徴型	平上型
	㈤	平上型	□	平上型
（三音節語）	「形」	上上上型	徴々々型	上上上型
	「小豆」	上上平型	徴々角型	上上平型
	「頭」	平平平型	□	上上平型
	「命」	平平上型	角々徴型	上平平型
	「兎」	平上上型	□	平上上型
	「兜」	平上平型	□	平上平型

（補）㈠㈡……「形」「小豆」…は国語学辞典附表の分類による。

□は仏遺教経に見られない型を示す。

ところで、右の対応表を観察すると、名義抄その他院政末期のアクセント体系に存在して、「仏遺教経」には認められない型もあるが、総体的に、近世初期よりは、院政末期の体系を反映していると考えても不都合ではない。例えば、二音節語に、角々型、（○○）、低平調の型及び、三音節語の角々徴型（○○○|）が見られるが、これなどは、明かに、院政末期のアクセント体系を反映していることを物語っていると思う。

なぜなら、右の表でも明かな如く、院政末期の平平型、平平上型は、近世初期に至る間に、○○→○|○、○○○|→○|○○の如き型の変化を遂げており、その変化の時期は、金田一春彦先生、(2)大野晋氏(3)の研究によって、南北朝時代頃とされている。

ところが、「仏遺教経」には、その変化以前の平平型、平平上型が見られるのであって、この旋律に反映しているアクセント体系が南北朝時代以前、即ち、名義抄などによって代表される院政末期のアクセント体系であることは明白である。言い換えれば、仏遺教経を或る種の音楽的旋律で唱え始めたのは、少くとも南北朝時代以前と言うことになる。そしてこの結論は、先に述べた鎌倉時代初期に、明恵上人が〃仏遺教経を講讃した〃とある日記の記載とも完全に符合するのである。

勿論、現在見られる「節博士」は、伝えによれば覚意上人（一二三七年嘉禎三年生）によって発案されたと言われ、明恵上人時代とは約十年余のへだたりがあり、その間は、音譜なしの記憶で曲節を唱えていたと推測される。いずれにしろ、この曲節が出来たのは、鎌倉時代初期であろうと推定される。

かって、金田一春彦先生は、この曲節について、《大体南北朝期頃のものであろう》とされたが、(4)筆者の考察によれば、この曲節、及び、そこに反映しているアクセントは、**《明恵上人時代、即ち鎌倉時代初期頃のものであろう》**と言う結論を得るのである。勿論、現在の譜本の中には、南北朝時代頃のアクセントらしきものが認められるが、筆者の考察によると、後に述べる如く、

これらは総て**《後世唱えられて行く間に生じた種々の曲節変化の結果生まれたものである》**と解釈され、説明がつくのである。

〔註1〕築島裕氏「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントについて」（「国語アクセント論叢」所収）

〔註2〕金田一春彦先生、「国語アクセントの史的研究」（「国語アクセントの話」所収、一九二頁以下参照）

〔註3〕大野晋氏「仮名遣の起原について」（「国語と国文学」昭二五・十二・号所収参照）。

〔註4〕「古代アクセントから近代アクセントへ」（「国語学」二十三輯所収、参照）

三、異例の考察

ところが〃仏遺教経〃の唱え方を示す曲節は総て語のアクセントを反映しているかと言うとそうではない。これは如何なる理由に基づくのであろうか。若し、〔A〕で述べた諸例が、旋律にアクセントを反映しているものとすると、どうして一方ではアクセントの反映していない例が生じたのであろうか。

以下、これらの説明を試みなくてはならない。

次に、これら《アクセントを反映していない例》をあげることにしよう。（〔B表〕の見かたは〔A表〕に同じ）。

〔B表〕

（二音節語）

【a】　名義抄で**上上**型（◯◯）の語。

①〈仏遺教経〉で角々型（◯◯）に表記されているもの。

例㊔是（コレ）〔3：1〕〔3：4〕〔10・1〕〔11：2〕〔13：3〕〔14：1〕〔19・1〕。之（コレ）〔1・4〕〔4・1〕〔5：2〕。此（コノ）〔3：3〕〔5：3〕〔10：1〕。是（コノ）〔4：4〕〔9・3〕〔9・3〕〔18・2〕。其（ソノ）〔9：4〕。牛（ウシ）〔5・4〕。水〔13・2〕。杖〔3・4〕

【b】　名義抄で**上**平型（◯◯）の語。

②〈仏遺教経〉で**徴々**型（◯◯）に表記されているもの。

㊔人〔3・4〕〔4：2〕〔4・4〕〔6・2〕〔7・2〕〔7：4〕〔7：1〕〔9・2〕〔10：2〕〔11・1〕。

（動）入る〔13：2〕、在（ヲ）く〔12・4〕、捨つ〔9：1〕、足る〔4・4〕〔10・1〕

③〈仏遺教経〉で角**徴**型（◯◯）に表記されているもの。

㊔人〔14・2〕

④〈仏遺教経〉で角々型（◯◯）に表記されているもの。

㊔人〔9・4〕〔10・3〕

【c】　名義抄で平平型（◯◯）の語。

⑤〈仏遺教経〉で**徴**角型（◯◯）に表記されているもの。

㊔事〔12：2〕〔17・1〕。語（コト）〔17・3〕。時〔16・4〕。月〔16・2〕。華（ハナ）〔5・2〕。者〔13：3〕〔13・1〕。

【d】　名義抄で平**上**型（◯◯）の語。

⑥〈仏遺教経〉で角々型（◯◯）に表記されているもの。

（動）飲む〔8：2〕、見る〔9：2〕。

（三音節語）

【e】　名義抄で**上上上**型（◯◯◯）の語。

⑦〈仏遺教経〉で角々**徴**型（◯◯◯）に表記されているもの。

㊔所〔2・1〕〔7・4〕〔19・2〕

【f】 名義抄で**上上**平型（○○○）の語。
⑧〈仏遺教経〉で**徵々々**型（○○○）に表記されているもの。
(動)持つ〔2∶1〕、名づく〔10・1〕、眠る〔6・4〕〔7∶1〕、畏る〔4・3〕
⑨〈仏遺教経〉で角々**徵**型（○○○）に表記されているもの。
(動)竭す〔6∶1〕、替る〔7∶3〕。

【g】 名義抄で平平平型（○○○）の語。
⑩〈仏遺教経〉で**徵々**角型（○○○）に表記されているもの。
(名)宝〔1・4〕。

【h】 名義抄で平平**上**型（○○○）の語。
⑪〈仏遺教経〉で**徵々々**型（○○○）に表記されているもの。
(動)恕（ナダ）む〔8・3〕。
⑫〈仏遺教経〉で**徵**角**徵**型（○○○）に表記されているもの。
(名)**心**〔4・2〕〔4・3〕〔5∶4〕〔6・3〕〔9・1〕〔10・4〕〔13・1〕〔13・3〕〔16・2〕。
(動)**墜**す〔4∶2〕。憂う〔10∶4〕。勤む〔15・2〕。勉む〔15・3〕。除く〔5・3〕〔19∶1〕。求む〔12・2〕〔16∶4〕〔18・4〕。**破**る〔8∶3〕〔5・4〕。
(副)而も〔14・1〕〔14・2〕。

【i】 名義抄で平**上**平型（○○○）の語。
⑬〈仏遺教経〉で角**徵々**型（○○○）に表記されているもの。
(名)薬〔16・1〕、病〔16∶1〕。
⑭〈仏遺教経〉で**徵々々**型（○○○）に表記されているもの。
(動)脱（ノガ）る〔10・2〕。

さて、〔B表〕の如く旋律と語のアクセントが一致しない例が認められるが、これらの例は如何なる原因によって生じたのであろうか。以下、これら異例の説明を試みようと思う。

ところで、このような異例が生じたことについて、どのような解釈がなされるかを考えると、次の三つの解釈があると思う。

Ⅰ これら〔B〕の異例は、旋律が出来た当初から、既にアクセントを反映していなかった。即ち《これらの異例は曲節の成立当時から存在していた》とする解釈。

Ⅱ 〔B〕も、最初は総て〔A〕と同じくアクセントを反映していたが、《後世の種々の曲節変化で異例が生じた》とする解釈。

Ⅲ 〔B〕のうち或るものは、《(イ)南北朝時代頃おこった〃アクセントの〃型の変化〃に引かれ、又は(ロ)アクセントの〃個別変化〃の結果生じた》とする解釈。

さて、以上**Ⅰ**、**Ⅱ**、**Ⅲ**の中で、どの解釈が、最も当を得たものだろうか。

まず、**Ⅰ**の解釈、これは極めて無意味な解釈であると思われる。なぜなら、同一資料の中で、一方では〔A〕の如くアクセントを忠実に反映しているものがありながら、一方では〔B〕の如くアクセントを反映していないものが共存していたと考えることは不自然だからである。

例えば、「四座講式」の如く、同一文献の中で、忠実にアクセントを反映しているものと、反映していないものが共存するものもあるが、これは曲節の最後の方がきまってアクセントを反映していないと言うようにその現われる位置が極めて規則的である。

ところが、〔A〕と〔B〕の諸例を検討すると、これは、曲節のきまった位置によってちがっているとは考えられない。即ち、〃同じ曲節に並んでいながら、一方がアクセントを反映し、一方は反映していない〃と言った例が多く見られるのである。また、語によってアクセントを反映したり、しなかったりするという傾向も認められない。

以上の点を綜合すると、〔B〕をⅠの如く解釈することは不自然であり、無理であると言わなければならない。

次に、Ⅱの解釈はどうであろうか。これはかなり妥当性のある解釈であると思う。というのは、この種の曲節は時代と共に変化することがあり得るからである。例の「四座講式」の曲節をみると、現在伝えられている曲節は、明恵上人の創作以後、種々の変化を遂げて複雑に成ったものであると言う。

例えば、その版本をその年代別に検討してみると、現在伝えられる新しい版本には、「徵のアタリ」(1)「徵のカ、リ」(2)などの曲節がみられるが、古い版本、即ち寛永三年の釈理峰の序のある版本に於いては、「徵のアタリ」がなくて、単なる「徵」に成っており、元祿年間に前島茂右衛門が刊行した版本では、「徵のカ、リ」もなくて、総て、単なる「徵」に成っているが如きである。(3)

これは何を意味するか。これはやはり先学の推定の如く、「徵のアタリ」「徵のカ、リ」は後世の発達で、古くは単なる「徵」の曲節で唱えられていたと考えるべきで、時代と共に曲節が変化したことを物語っていると思う。

このような例からも明かな如く曲節が時代と共に変化することは十分に考えられることである。したがって、Ⅱの解釈は、十分な妥当性のある考え方であると思われる。

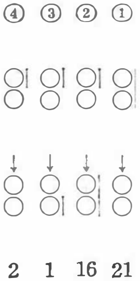
次に、Ⅲの解釈はどうであろうか。これも十分におこる可能性のある曲節変化の原因となると思う。

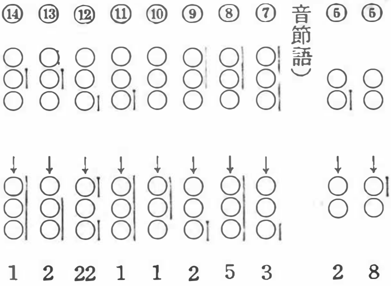
例えば、真言、天台各宗には、《出合（いであい）》なる漢語の発音上の法則が存する。これは仏教界の《論義》で古く漢語が文字の四声通りに発音されていたものが、国語アクセントの型の変化に引かれて、漢語アクセントにも変化が生じた。これが《出合》(4)であると考えられる。このように、国語アクセントの型の変化が伝承されてきた古来の曲節に影響して、変化を起させることは十分に考えられることである。したがって、Ⅲの解釈も、当然考えられてよいと思う。但し、Ⅱの解釈と合せ考える場合、Ⅱの解釈の条件がなく、しかも、国語アクセントの変化と曲節の変化が一致した場合に、はじめてⅢの解釈が考られるのである。さて以上によれば、〔B〕は、先ずⅡのそれからⅢの解釈によることが適切である。

それでは〔B〕の異例は、Ⅱ、Ⅲの解釈によって具体的にどのように説明できるだろうか。以下、その説明を試みようと思う。

まず、考察に先立って〔B〕にあげた異例を名義抄などのアクセントと対応させてその関係を、上声と徵を◯|。平声と角を◯で示すと、次の通りである。

（二音節語）　（例数）





以上、①～⑭の変化は、はたして《後世におこった旋律変化》として十分に説明しつくすことができるだろうか。

まず、筆者は考察にあたって、若し旋律の変化が起るには、いかなる場合が想定されるかを明かにして置こうと思う。

それには、次のような場合がある。

(A)直前の高い旋律に引かれて、次の音節が高められる場合。

㋑一単語（文節）内で変化がおこる場合。

㋺先行語によって変化がおこる場合。

(B)直前の低い旋律に引かれて、次の音節が低められる場合。

㋑一単語（文節）内で変化がおこる場合。

㋺先行語によって変化がおこる場合。

しかも、(A)(B)㋑㋺を通して、変化が一音節だけに限られる場合と二音節に及ぶ場合もあるであろう。

〃旋律変化〃には、大別して、以上(A)(B)各㋑㋺の如き場合が考えられるが、①～⑭の諸変化はこれをどのように説明されるであろうか。以下、個々の例を吟味して行こうと思う。

(い)、②⑧⑬、この変化は、Ⅱの解釈によって、(A)－㋑の如き、〃曲節変化〃であり、いずれも直前の高い旋律に引かれて、次の低い音節が高められた結果おこったものと思う。これは〃アクセント変化の法則〃(5)から言っても、発音の欲求にかなうのである。

(ろ)、④⑥、これは、Ⅱの解釈に基づいて、④は(B)－㋺、⑥は(B)－㋑の結果生じた〃曲節変化〃である。即ち、低い直前の音節に引かれて、次の音節が低められた○○→○○、○○→○○の如き変化であると思う。

(は)、①⑦、この二つの変化も、Ⅱの解釈で説明できる。即ち、(B)－㋺によって一緒になり、直前の語の低い音節に引かれて、本来高かった第一、第二音節が低められた結果おこった、○○→○○、○○○→○○○の如き〃曲節変化〃であると思われる。ところで、これらの直前の語がはたして低い曲節かどうかを検すると例えば、

有（リ）ニ涅槃ー是（ヲ）名（ク）ニ少欲ー（ト）〔10・1〕（シシチ ウガ カガチ チチチ チ チチチカ）

所（ル）ニ憐愍ー是（ヲ）名（ク）ニ知足ー（ト）〔11・2〕（シシキチ チ カカチシシキ チ チシシ）

（キ＝宮、シ＝商、カ＝角、チ＝徴、ウ＝羽を示す）

の如く、○で示された「是（コレ）」の直前の曲節（～で示したところ）は、低い「商」、または「宮」であり、これは①⑦の総ての用例にあてはまる条件である。この事実は〃曲節変化〃を証明するに十分な資料であると思う。

(に)、⑩、この変化例は、わずか「宝（タカラ）」一例だけであるが、これ

は、(A)-㋺によっておこした曲節変化であると思う。本文を観察すると、

　貧（カチ）〜人（チチ）得（カカチ）レ宝（チチカチ）ルカ○ヲ………〔1・4〕

の如く、「宝」の直前の語「人」の曲節は、高い**徴徴**で、この高い曲節の惰性で、次の語の第一、二音節を高く発音した結果おこった○○○→○○○の如き〃曲節変化〃であると思う。なお⑩は、院政末期から近世初期に至る間におこった〃型の変化〃○○→○○○に引かれた結果生じた変化、**Ⅱ**の解釈も一応が考えられるが、右にあげた本文をみると、助詞「を」が高い「徴」で、表記されており助詞を含めてその変化を示せば、

　○○○〔○〕→○○○〔○〕

の如くであるが、〃型の変化〃は

　○○○〔○〕→○○○〔○〕

で、助詞が低められて行く、この点がやや違う。したがって、⑩は(A)-㋺の如く解することが適切であると思う。

(ほ)③⑨、これは、これまで説いてきた(A)(B)の変化では説明できない。ところが、ここで考えられることは、アクセント変化に見られる〃高さの山の後退〃の現象である。③⑨は、これの同種のものと見られる。しかも、本文を検すると、〃山の後退〃をおこす二つの条件が具わっている。

　その第一は、直前の語の曲節が総て、低いと言うことである。

　第二は、「人」の第一音節、「竭（ツク）す」「替（スタ）る」の第一、第二音節が音声学的に、いずれも《母音の無声化》をおこす条件になっている。

　以上から、③⑨は、右の二つの条件でおこった〃山の後退〃の結果生じたものであると説明される。

(へ)⑭、この変化は、これまでの〔**い**〕〜〔**ほ**〕の方法では説明できない。ところが、ここで考えてみたいのは、名義抄の三音節動詞で、○○○型の例は、他の型の動詞に較べて用例数も少なく、しかも例えば「歩く」「隠す」「参る」そして⑭「脱（ノガ）る」の如く、総て、複合語的構成の語である点から考えて他の所属語彙の多い型に引かれて類推変化をおこすことがあり得ると思う。⑬の変化も、このような類推変化によって、個別的な曲節変化が生じたものと考えれば、○○○→○○○の変化を類推による変化として、そのままに認めても不都合ではない。また、「脱（ノガ）る」という語は早く文語的になって、あまり用いられなくなって行ったことなども、個別的な変化をおこす原因になっているのではないだろうか。

(と)⑪この例は「怨む」一語である。この変化は、(A)-㋺によって、直前の高い曲節に引かれた結果二音節が高められたとも考えられるが、「怨む」という語から考えて、古くから文語化した要素が大きい。したがって、早く文語化した結果、○○○型へ類推をおこして個別的変化を遂げたものと思う。

(ち)⑤⑫、最後に残ったこの二つの変化の説明は、かなり重要である。これについて、金田一春彦先生は、《これは南北時代のアクセントの型の変化過程を反映したものである。》として、この文献の曲節が、南北朝時代のものであることの唯一の証拠とされた。はたして、そうであろうか。若し、•〃型の変化〃の影響だとすれば、○○○→○○○→○○○という変化過程を証明する貴重

な資料となるからである。

しかし、ここで注意したいのは、若しかすると、⑤⑫の変化も(A)〜(ロ)による曲節変化ではないかと言うことである。そこで、これらの諸例直前の曲節をみると、次の如くである。

⑤の例

(i)直前の曲節が高い徴の例。

事〔17・1〕。語〔17・3〕。者〔13:3〕〔13・1〕。華（ハナ）〔5・2〕。

(ii)直前の曲節が低い角・商の例。

事〔12・2〕。時〔16:4〕。月〔16・2〕。

⑫の例。

(i)直前の曲節が高い徴の例。

心〔4・2〕〔4・3〕〔5:4〕〔6・3〕〔9・1〕〔10・4〕〔13・1〕〔13・3〕〔16・2〕。墜（ヲト）す〔4:2〕。憂う〔10:4〕。勤む〔15・2〕。除く〔19:1〕。求む〔12・2〕〔16:4〕〔18・4〕。破る〔5・4〕〔8:3〕。

(ii)直前の曲節が低い角・商の例。

勉む〔15・3〕。除く〔5・3〕。而も〔14・1〕〔14・2〕。

右の通り、直前の曲節には高いもの徴と、低いもの角があるが、高いものの方がはるかに多い。

ところで、⑤⑫の(i)は、直前の高い曲節から考えて、〝型の変化〟の影響と考えられるよりも、高い直前の曲節に引かれておこった、○|⌋ ○○→○|⌋ ○|○、○|⌋ ○○○|→○|⌋ ○|○○|の如き〝曲節変化〟の結果、徴角型、徴角徴型が生じたと解する方がより自然であると思う。

次に残る、⑤⑫の(ii)はどうか。これは、後世唱えられていく途中、南北朝頃の〝型の変化〟に引かれた結果生じたものとみられる。

ところで、○○→○|○○の変化は、別として、○○○|→○|○○の変化は、音声学的立場から見ても、一挙に平平**上**型から**上**平平型へ移ることは無理であり、途中に**上**平**上**型を通った、○○○|→○|○○|→○|○○の如き変化過程であったろうと推則されるが⑫の(ii)はこの○|○○|を反映したものと見られるのである。

即ち、⑤⑫のうち、(i)は直前の曲節に引かれておこった〝曲節変化〟(ii)は南北朝の〝型の変化〟に引かれた類推変化であると説明できる。

以上述べて来た通り、〔B〕の異例は、総て後世におこった諸変化として説明できたように思う。この結果、〔B〕の諸例も総て曲節の成立した当時は、〔A〕の如く正しくアクセントを反映していたであろうことが明かになるのである。

〔註1〕 一音節の上声の文字の直前、または高く唱えられる助詞の直前に来り、文頭、または低音の直後に来た時に現れる西洋音階のミミで低平調の曲節。

〔註2〕 一音節文字の直前、高い助詞の直前、一音節だけ高い音の直後に現れる。西洋音階のラミで高低調の曲節。

〔註3〕 金田一春彦先生によれば、岩原諦信師もこの考えに同意されたとのことである。「日本四声古義」（国語アクセント論叢所収）参照。

〔註4〕 「日本四声古義」（国語アクセント論叢所収）六七二ページ参照。

〔註5〕 金田一春彦先生、「語調変化の法則の探求」（Tôyôgo Kenkyû Dai 3gô）

（あとがき）

最後に、以上の考察の結果をまとめれば、次の如くである。

一、「仏遺教経」の現在の譜本の曲節には、アクセントをそのまま反映しているものと反映していないものとがある。

二、反映しているアクセントは、院政末期の名義抄のアクセント体系と一致する。

三、アクセントを反映していないものは、次の三つの理由で、後世唱えられていく間に〃曲節変化〃をおこしたと考えられる。

(イ)後世唱えられていく間に、直前の曲節に引かれておこる同化作用によって規則的な〃曲節変化〃がおこった。

(ロ)後世、南北朝時代頃におこったアクセントの型の変化に引かれて、或る種の語の曲節が変化した。

(ハ)その他に、母音の無声化によって曲節変化をおこしたもの、類推作用によって個別的曲節変化をおこしたものが少数ある。

四、仏遺教経の曲節には、その成立当時、「徴」「角」で表記された部分に総て、名義抄のアクセント体系を反映していたと思われる。

なお、未見ではあるが、どこかに古い曲節を伝える譜本が存するのではないかと思われる。もし、その種の古い曲節と現存譜本との比較研究ができるならば、更に新しい〃曲節変化〃の過程が明かにされるのではないかと思う。古い版本を所蔵される方の御教示をいただければ幸いである。

（追記） 小稿は、昭和三十年十一月の国語学会研究発表会で発表したものに加筆したものである。なお、考察にあたっては、金田一春彦先生から、いろいろと御教示を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である。